

2021年6月17日(木)

老球の細道615号

第67回県高等学校バスケットボール大会観戦感想

会津バスケットボール協会 室井 富仁

昨年は新型コロナのため高体連史上初の大会中止となったが、今年は無観戦試合ながらなんとか開催することができた。1月の県新人大会もコロナで中止だったので今回のインターハイ県予選は優勝校の予想は難しかった。ベスト4に男子は福島東陵、福島南の優勝常連校にこの2、3年の間メキメキ力をつけた帝京安積、開志学園高校。女子は郡山商業、帝京安積、福島西、福島東陵の常連校が勝ち残った。会津地区代表校が1チームも入らなかったのは残念無念。

男子優勝は福島東陵、女子は郡山商業となった。男女ともに決勝戦は1クォーターから優勝チームが大差をつけて楽勝かと思われるゲーム展開であったが、どちらも途中からペースダウンして準優勝校に追い上げられ苦しめられた。特に男子は開志学園が4クォーターで逆転をして、あわや初優勝かと思われたが、さすがに優勝経験豊富な福島東陵が留学生センターにボールを集めて再逆転を果たし2点差で辛くも逃げ切った。

ベスト4に残ったチームはどのチームも一人一人が積極的にシュートを打ってくるチームだった。特にトランジションオフenseにおいては、私たちの時代のように適確にアウトナンバーを作ってゴール近くでイージーシュートという発想ではなく、打てるスペースがあったら3Pでも積極的に打っていた。入ればOK、入らなければゴメンナサイ。しかし、偶然で入っていたシュートは4クォーターずっと入り続けることはなく、ゲーム後半ではまるで入らなくなってしまうことがあるように感じる。接戦になると尚更である。一方、チームプレイ、チームのリズムでシュートを打っているチームは、最初に入らなくても後半の大事な場面になってくると急に入りだすことがある。そして入らなくてもリバウンドが取れてセカンドシュートのチャンスも廻ってくる。接戦になっても落ち着いて打てる。

どんな大会でも観戦して勉強になることはたくさんある。特に1点を争うシーソーゲームは教材満載である。今大会は男子決勝戦ゲームで下記の3点について考えさせられた。

- ①ポストにフィードパスをしてダブルチーム、トリプルチームされてポストプレイが封じられた時チームオフenseのオプションをどうするか。
- ②4クォーター残り15秒。オフense2点差のリードでタイムアウト。逃げ切るためにバックコートからスローインを選択するか、さらにリードを広げるためか、ボール運びに自信がないためにフロントコートからスローインを選択するか。
- ③残り5秒で2点差を逆転、または同点に追いつくためのオフense。セットプレイか1:1か。アウトサイドシュートかドライブでファールを誘発か。最後のシュート誰に託すのか。

今後、県選手権、県選抜大会と続くが、福島県は私立の強豪校と選手が集まる県立の強豪校が覇権を争う時代が続く。今後ますます地産地消の公立高校は厳しくなるが、だからこそやりがいはある。不可能を可能にする努力のプロセスこそ真の学習であり喜びである。